

国立国語研究所学術情報リポジトリ

脱文脈化の観点から見た共想法に基づく高齢者談話の分析

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-01-21 キーワード (Ja): キーワード (En): Coimagination Method, older adult's discourse, decontextualization, rhetorical function, Rhetorical Unit Analysis 作成者: 田中, 弥生, 小磯, 花絵, 大武, 美保子, TANAKA, Yayoi, KOISO, Hanae, OTAKE-MATSUURA, Mihoko メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00003518

脱文脈化の観点から見た共想法に基づく高齢者談話の分析

田中弥生^a 小磯花絵^b 大武美保子^c

^a 国立国語研究所 研究系 音声言語研究領域 非常勤研究員

^b 国立国語研究所 研究系 音声言語研究領域

^c 理化学研究所 革新知能統合研究センター

要旨

本研究は、高齢者の認知機能を補完しうる言語能力の指標として、脱文脈化観点が適用可能かを明らかにすることを目的に、その第一段階として、共想法によって収録された、高齢者による談話の性質を、脱文脈化の観点から明らかにするものである。共想法とは高齢者の認知的健康につながる会話を支援する手法で、脱文脈化の観点からの分析には、選択体系機能言語理論の枠組みの談話分析手法である修辭ユニット分析の分類法を用いた。修辭ユニット分析では、メッセージ（概ね節）という分析単位毎の修辭機能と脱文脈化指数を知ることができる。2種類のテーマに基づく共想法談話各3セッションを分析した結果、テーマ毎に多用される修辭機能が異なること、こうしたテーマ毎に多用される修辭機能が、複数のセッション、セッション内の「話題提供」と「質疑応答」の両パート、複数の参加者に共通して観察されることから、テーマに依存した基本的な修辭機能が存在することが分かった。また、「話題提供」ではテーマに依存しない個人特有と見られる修辭機能の使用も見られることや、個人として「話題提供」であまり用いない修辭機能を、他の参加者とのやりとりが生じる「質疑応答」の中で使用するケースもあることが分かった*。

キーワード：共想法、高齢者の談話、脱文脈化、修辭機能、修辭ユニット分析

1. はじめに

本研究の目的は、高齢者の認知機能を補完しうる言語能力の指標として、脱文脈化観点が適用可能かを明らかにすることで、本稿ではその第一段階として、共想法によって収録された高齢者による談話の性質を、脱文脈化の観点から明らかにする。

共想法は、高齢者の認知的健康につながる会話を確実に発生させることができるよう工夫を加えた会話支援手法（大武 2011, Otake et al 2011）で、以下の特徴により定義される（大武 2010: 664）。

- (1) あらかじめ設定されたテーマに沿って、写真やイラスト、時に音楽や実物などの素材と共に話題を、参加者が持ち寄ること。
- (2) 順序と制限時間を決めて、「話題提供」と「質疑応答」の時間を設けて、話し手と聞き手が交互に入れ替わり、参加者に均等に、話す、聞く、質問する、答える、の四種類の機会を与えること。

* 本研究は JSPS 科研費 18KT0035, 19K00588, 19H01138, 20H05022, 20H05574, JST-DFG-ANR 研究プロジェクト JPMJCR20G1 の助成を受けて行われた。言語処理学会第 27 回年次大会（NLP2021）（オンライン開催）（田中・小磯・大武 2021）及び 2021 年 4 月 27 日 NINJAL サロン（国立国語研究所・オンライン開催）において多数の有益なご指摘を頂戴した。記してここに謝す。

共想法の流れを以下に示す。(NPO 法人ほのぼの研究所 2020: 3-4)

1. テーマに沿った出来事を写真に撮る (共想法では、毎回、ユニークなテーマが設定される。日常生活の中でそのテーマに沿った面白いことや話題になることを見つけ、写真に撮る。)
2. 1分間で話をする (自分が撮った写真を大きく映して、参加メンバーに見せる。写真1枚につき、1分間でそれについて話をする。他のメンバーは、話をよく聴いて、質問や感想を考える。)
3. 2分間で質問や感想を言う (写真の話を聴いた後、それについて、1枚の写真につき2分間、他のメンバーが順番に質問をしたり感想を言ったりする。話し手は、その質問や感想に答える。)
4. チェックリストで参加の姿勢を振り返る (脳の力を引き出す聞き方や質問の仕方を参加の姿勢としてチェックリストにまとめている。適切に参加できたかを振り返る。)
5. 写真当てクイズと聞き取り確認をする (全部の写真について、話と質問・感想が終わったら、写真をランダムに見て、誰の写真か当てるクイズをする。時間があれば、聞き取った内容を時間を決めて書き出す。)
6. 宿題として200字要旨に記録する (自分が今日話した内容を思い出しながら、写真1枚につき要旨を200字程度にまとめて記録する。)

本稿では、2の話題提供と3の質疑応答を分析対象としている。

認知症の予防や症状の改善を目的とした会話の手法には、回想法があるが、回想法が過去の経験を語るのに対して、共想法では現在の視点が語られる点において両者は異なる。共想法は現在を中心に過去から未来まで多様なテーマを設定することで、常に新しい話題を見つける習慣を身に付けることを目指すものであり、こうした点を踏まえて共想法談話の性質を脱文脈化の観点から分析する。

本稿における脱文脈化とは、コミュニケーションが行われている「今ここ」の時空とその発話内容との、時間的・空間的距離の程度をさす。例えば「その本を取って」のように同じ時空にいる聞き手に行為を要求したり、「この花をあげるよ」のように聞き手に物品を提供したりする発話は、最も文脈化しており、脱文脈化の程度は最も低い。一方、「桜はバラ科の植物です」のような普遍的なことや定義を述べる発話は、会話の生じている時空とは直接関わりがなく、脱文脈化の程度は最も高いものとなる。発話の脱文脈化の程度を知るために、修辭ユニット分析(Rhetorical Unit Analysis; RUA)の分類法を用いる。

修辭ユニット分析は、選択体系機能言語理論における談話分析手法の1つで、空間と時間が言語テキストにどのように示されているかをとらえ、脱文脈化言語(de-contextualized language)・文脈化言語(contextualized language)の相違をとらえる枠組みとして知られている(Cloran, 1994, 1995, 1999, 2010)。テキストの意味単位を特定するための手法(佐野 2010b)であるが、その過程において発話機能(speech function)、中核要素(central entity)、現象定位(event orientation)の3つをメッセージ単位で認定することで、修辭機能(rhetorical function)の種類を特定し、そ

の結果として脱文脈化の程度 (degree of de-contextualization) を知ることができる。英語母子会話の分析として提案され、佐野・小磯 (2011) で日本語へ適用された。

修辞ユニット分析の分類法を用いた研究には、専門的作文指導への活用の提案 (佐野 2010b)、手順を説明する場面や取引先との打ち合わせの談話の特徴の確認 (田中・浅原・小磯 2020, 田中・小磯 2021)、家庭での幼児の親との発話における検討 (田中・小磯 2019, 田中・藤・小磯 2021)、児童の作文における脱文脈化の特徴の確認 (田中 2018, 田中・佐尾・宮城 2021) などの分析があり、目的や話題内容、状況による、談話やテキストの脱文脈化程度の様相が検討されている。

修辞ユニット分析は、元々は子供の発達の特徴をとらえる指標として提案されたものである。幼児は身振りや幼児語を用いてコミュニケーションをとる時期があり、成長に従ってその場の時空のことを話せるようになり、さらに、その場にいない祖父母や友達のことを話したり、過去に行った公園のことを話したりできるようになる。このことは脱文脈化の観点からは、発話の場である「今・ここ・わたし」の時空と発話内容の時空との距離が離れていき、脱文脈化の程度が徐々に上がっていくといえる。さらに、学校に上がると、実生活の状況とは切り離された脱文脈化された概念的な知識を獲得することを要求される (岩田 1995)。このように、人は成長とともに脱文脈化した表現を身につけていく。

一方、本研究では、高齢者の認知的健康につながる会話を支援する手法として開発された共想法の談話の分析に、修辞ユニット分析の分類法を適用する。実際に、共想法における談話は、雑談との比較から、語彙の使用量が雑談より有意に多いこと、また、共想法のほうが意味のある発言の割合も優位に多いことが明らかになっている (Otake-Matsuura et al. 2021)。特定のテーマについての写真と話題を準備し、「話す」だけでなく「聞く」「質問する」「答える」をバランスよく行うという環境において、言語機能を多角的に活用する効果があることがうかがえる。また複数のテーマで共想法を重ねる中で、特定の修辞機能に偏らないバランスのとれた発話がなされることも重要であると考えらる。

そこで本稿では、1) テーマによって修辞機能・脱文脈化指数はどのような傾向を示すか、2) 個人差は見られるか、3) 「話題提供」のパートと「質疑応答」のパートで異なりは見られるか、などの観点から分析を行い、共想法による高齢者談話の特徴を明らかにする。以下、2 節で分析対象と分析方法、3 節で分析結果を述べ、4 節で考察を行い、5 節でまとめと今後の課題を述べる。

2. 分析対象と分析方法

2.1 分析データ

分析データは、2018～2019 年度に開催した 13 回の共想法のうち 2 回分の談話である。それぞれのテーマは「私の好きな色」と「平成から令和」である。共想法は複数回実施される中で、毎回異なるテーマが設定され、そのテーマは、①身近な物の価値を見つけ出す、②行動したことから価値を見つけ出す、③行動を計画する、という 3 つの要素のうち、1 つもしくは複数の要素を考慮して設計されている (ほのぼの研究所 2020: 11-12)。分析対象とする「私の好きな色」は、

①に該当し個人の嗜好や特性に関わるもので、「平成から令和」は、撮影する対象を決め、行動を計画する③の要素と、撮影した物から価値を見つけ出す②の要素が含まれるものである。このように、異なる要素を含み、発話の修辞機能や脱文脈化程度の特徴が異なることが予測できることからこれらのテーマを選定した。表1に概要を示す。

表1 分析対象データの概要

テーマ	セッション	参加人数	「話題提供」時間 (1人当たり)	「質疑応答」時間 (1人当たり)	参加者 ID (P: 参加者 (高齢者), T: 実験担当者 (非高齢者)) (網掛け: 「話題提供」個人別分析対象) (太字: 「質疑応答」分析対象)			
私の好きな色	A	4	1分	2分	P01	P02	P07	(T01)
	B	4	1分	2分	P03	P04	P08	(T02)
	C	4	1分	2分	P05	P06	P09	P10
平成から令和	D	4	1分	1分	P02	P04	P05	P11
	E	3	1分	1分	P12	P13	P14	
	F	3	1分	1分	P01	P03	P06	

参加者はいずれも東京都内で共想法活動に参加するシルバー人材センター登録の高齢者である。実施回によって参加者に変動はあるが、本稿で分析対象としたセッションの参加者は3～4名である。各セッションの中では、参加者がテーマに沿って自分自身で事前に撮影した写真を提示しながら他の参加者に対してその内容を1分で説明するという「話題提供」が参加者毎に行われ、その後、最初の話題提供者の写真に戻り、再度提示しながら、他の参加者から質問を受けて回答するという1分または2分の「質疑応答」が繰り返された。なお、一連のセッションは理化学研究所の倫理審査の承認を得て実施した。

本研究では、全体的な傾向を分析する際には、実験担当者（非高齢者）である T01, T02 を除く P01 から P14 の 14 名のデータを用いた。また個人別の分析については次の通りとした。独話のため個人の特徴が強く現れると考えられる「話題提供」の分析では、「私の好きな色」と「平成から令和」の両方のテーマに参加している 6 名（参加者 ID 網掛けの P01 ～ P06）を分析対象とした。また、「質問する」「答える」といったやりとりのある「質疑応答」の分析では、個人別の分析対象者 6 名に含まれる人のみで構成され、他の参加者が含まれないセッション F の参加者 3 名（参加者 ID 太字の P01, P03, P06）を分析対象とした。

2.2 分析方法

分析には、修辞ユニット分析（Rhetorical Unit Analysis, 以下 RUA）の分類法を用いる。

RUA では、「メッセージ」を基本的な分析の単位とする。RUA による修辞機能の特定と脱文脈化程度の確認の手順は、1. メッセージへの分割とその種類の認定、2. 発話機能・中核要素・現象定位の認定、3. 修辞機能の特定と脱文脈化指数の確認、である。以下に概要を示す。

2.2.1 メッセージへの分割と種類の認定

まず、分析対象をメッセージ単位に分割 (segment) する¹。メッセージは、原則として節に相当するが、連体修飾節は該当しないなど、節と完全に一致するものではない。会話をデータとする場合、ポーズ等や他者のあいづち、あるいは共話のために分割された行を、一つのメッセージと認定する場合もある。主部や述部が省略されていると考えられる場合には可能であれば補足してメッセージへの分割、統合を行う。メッセージは、主節や単文を「自由 free」、従属節を「拘束 bound」、フィラーなどを「位置づけ positioning」に分類する。「拘束」は、従属節の性質によって、さらに「拘束；意味的従属」と「拘束；形式的従属」とに分類する。「拘束；意味的従属」は、従属するメッセージの状況（時間・場所・原因・結果等）を説明するものが該当し、それ以外は「拘束；形式的従属」となる。「拘束；形式的従属」と「自由」について、この後の分類を行う²。(1) に示したのは、本研究の分析対象データの一部である。

(1)	メッセージ	メッセージの種類
i.	実はこれラクーアからドームの方に渡る 渡るところに橋があるんですけど	自由
ii.	橋のところはこの こちらから見ると	拘束；意味的従属
iii.	平成って見えるんですけど	自由
iv.	あの	位置づけ
v.	このマークがありまして。	自由
vi.	で ドーム側からこちらを見ると	拘束；意味的従属
vii.	実はもう一枚撮ってきてあるんですけど	拘束；形式的従属
viii.	令和になってるんですね	自由

(テーマ「平成から令和」セッション D P03 「話題提供」より)

2.2.2 発話機能・中核要素・現象定位の認定

発話機能は、「提言 proposal」か「命題 proposition」に分類する。「提言」は表 2 の (a) の品物・行為の交換（提供 offer あるいは要求 command）に関するメッセージで、この段階で修辞機能「行動」と脱文脈化指数 1 が特定される。「命題」は (b) の情報の交換（陳述 statement あるいは質問 question）に関するメッセージが該当する。2.2.1 の (1) でメッセージの種類が「自由」および「拘束；形式的従属」の i, iii, v, vii, viii は、情報を提供しており、その発話機能は「命題」である。発話機能が「命題」のメッセージについて、中核要素と現象定位を認定する。

¹ 佐野 (2010a) に発話からメッセージのセグメンテーションの解説がある。

² 談話データでは「拘束；形式的従属」と「自由」の区別が明確ではない場合もあるが、どちらも同様に分析対象となるため、いずれかに分類すればよいものとする。

表2 発話機能 (Halliday & Matthiessen 2004: 107)

role in exchange	commodity exchanged	
	(a) goods&service	(b) information
(i) giving	“offer” would you like this teapot?	“statement” he’s giving her the teapot
(ii) demanding	“command” give me that teapot!	“question” what is he giving her?
	提言	命題

中核要素はメッセージの中心となるものがコミュニケーションの場面に存在するか否かによって特定する。基本的には主語によって表現されるが、明示されていない場合には、前後のメッセージなどによって判断する。中核要素の分類を図1に示す。

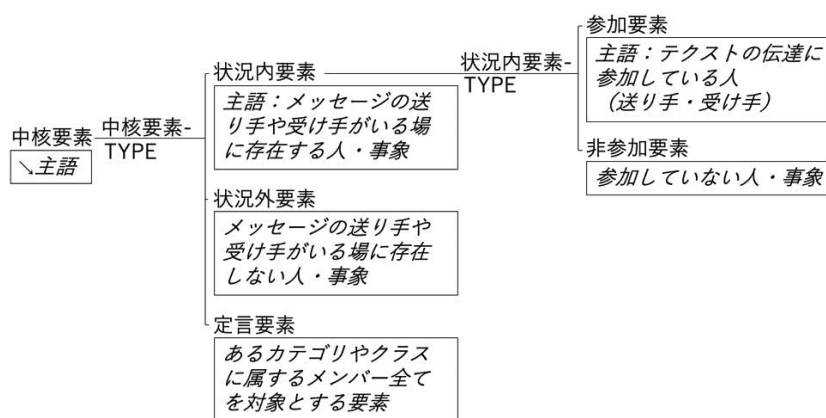


図1 中核要素の分類 (佐野・小磯 2011)

中核要素はまず「状況内要素 co-present entity」「状況外要素 absent entity」「定言要素 generalized entity」のいずれかに分類し、「状況内要素」はさらに「参加要素 interactants」「非参加要素 non-interacting entity」に分類する。(1) i「実はこれラクーアからドームの方に渡る 渡るところに橋があるんですけど」の主語「橋が」は、共想法が行われているその場の外にあるものであるため「状況外要素」である。また、v「このマークがありまして」の主語は「このマークが」で、共想法談話が行われている場で提示している写真の中に見えるものであるため「状況内要素」の「非参加要素」, vii「実はもう一枚撮ってきてあるんですけど」の主語は明示されていない「私は」であるため「状況内要素」の「参加要素」と認定する。

次に、現象定位は、メッセージによって表現されている出来事がいつ起こったかについて、メッセージが伝達されている時 (Time of speaking 以下, Ts) を基準とした時間的な位置を特定して示す要素で、副詞や述部から判断する。現象定位の分類を図2に示す。

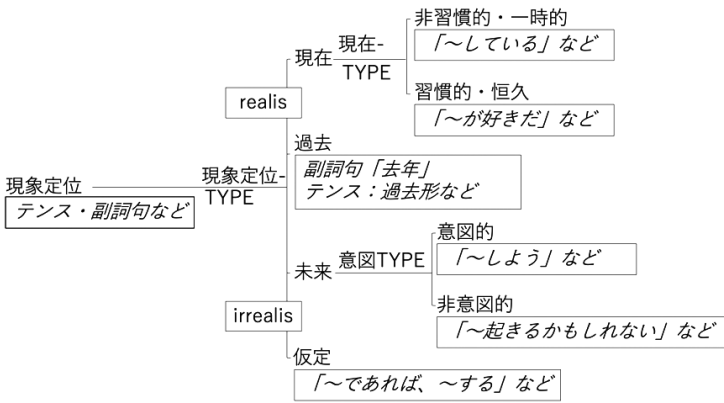


図2 現象定位の分類（佐野・小磯 2011 をもとに作成）

メッセージの内容がすでに起こっているか否かで、既現実・現実 *realis* と未現実・非現実 *irrealis* に分類し、*realis* は過去の出来事か、現在起こっていて一時的なことであるか、習慣的なことや恒久的なことであるかを判断する。*irrealis* は条件によって起こる場合には「仮定」、発話者や主語の意思によって起こるのであれば「未来；意図的」、意思とは関わりなく起こるのであれば「未来；非意図的」に分類する。前掲の (1) i 「実はこれラクーアからドームの方に渡る渡るところに橋があるんですけど」の述部は「あるんです」で、橋があることは一時的なものではないため「現在；習慣的・恒久」と認定する。また、(1) vii 「実はもう一枚撮ってきてあるんですけど」の述部は「撮ってきてある」で「現在；非習慣的・一時的」と認定する。

2.2.3 修辞機能の特定と脱文脈化指数の確認

表3に示したように、発話機能と中核要素と現象定位の組み合わせによって修辞機能と脱文脈化指数が特定される。

表3 修辞機能と脱文脈化指数の特定

			発話機能						
			提言	命題					
				現象定位					
				現在		過去	未来		仮定
				非習慣の 一時的	習慣の 恒久		意図	非意図	
中核要素	状況内	参加	[1] 行動	[2] 実況	[7] 自己記述	[3] 状況内回想	[4] 計画	[5] 状況内予想	[6] 状況内推測
		非参加	n/a		[8] 観測				
	状況外	定言	[9] 報告	[13] 説明	[10] 状況外回想	[11] 予測			[12] 推量
			n/a	[14] 一般化					

「n/a」は該当なし／背景が灰色の部分が修辞機能の種類／〔〕内は脱文脈化指数

により分類作業を行った。信頼性を検討するためにカッパ係数を求めたところ、 $k = .72$ という実質的に一致しているとみなされるカッパ係数が確認された。

3. 分析結果

3.1 「話題提供」の分析

本節では「話題提供」のパートを対象に、全体の傾向と参加者毎の傾向を探る。

表5と図3に、「話題提供」におけるテーマ毎・セッション毎の修辞機能〔脱文脈化指数〕⁴の出現数・出現率を示す。テーマ「私の好きな色」では、【自己記述】[7]が、3つのセッションのうち2つのセッションで10回以上、1つのセッションで9回と、他の修辞機能より多く用いられる傾向が見られる。提供する話題が「私の好きな色」という個人の嗜好であることから、自分自身に近い話を述べる必要があるためと考えられる。

表5 セッション毎の「話題提供」における修辞機能の出現数

	私の好きな色			平成から令和		
	A	B	C	D	E	F
一般化 [14]	0	0	0	0	0	0
説明 [13]	5	6	6	1	1	7
推量 [12]	0	0	0	0	0	0
予測 [11]	0	0	0	0	0	0
状況外回想 [10]	0	1	0	7	4	11
報告 [9]	0	2	0	0	1	2
観測 [8]	4	4	8	1	5	9
自己記述 [7]	12	16	9	1	1	0
状況内推測 [6]	0	0	0	1	0	0
状況内予想 [5]	0	0	0	1	0	0
計画 [4]	1	0	1	4	0	1
状況内回想 [3]	1	0	9	18	14	16
実況 [2]	6	4	11	4	6	1
行動 [1]	0	0	0	0	0	0

⁴ 以下、修辞機能と脱文脈化指数をあわせて述べる際は、単に修辞機能とのみ記し、特に言及する必要がある場合のみ脱文脈化指数と記す。

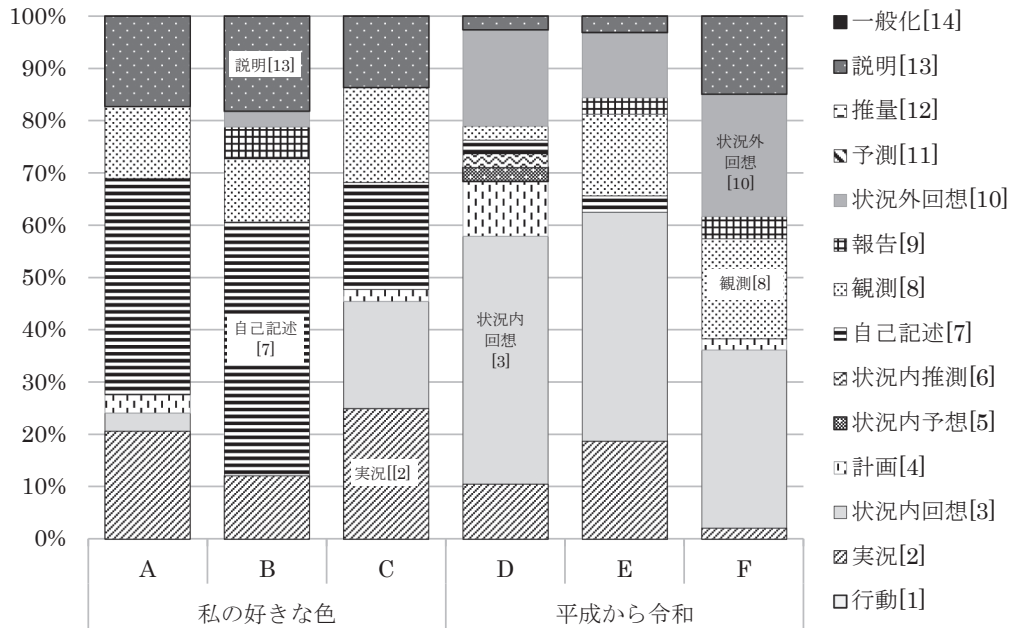


図3 セッション毎の「話題提供」における修辞機能〔脱文脈化指数〕の出現率

(3) に「私の好きな色」のうちセッションBでの発話例を示す。「ちょっとこの写真ボケてるんですが」(【観測】[8])と写真の状態について述べた後、青を選んだこと(【実況】[2])、自分の星座(【自己記述】[7])、「昔から青が好きでした」(【自己記述】[7])というように、自分自身に関わることについて【自己記述】[7]を用いながら説明していることが分かる。

(3) メッセージ

【修辞機能】〔脱文脈化指数〕

- i. ちょっとこの写真ボケてるんですが 【観測】[8]
- ii. あのスカーフの青、青でも紫に近いような青を選びました 【実況】[2]
- iii. えー、私は生年月日で言うと魚座、星占いでいうと魚座なので、 【自己記述】[7]
- iv. その、この海の色とかそういうのがラッキーカラーということで 【説明】[13]
- v. 昔から青が好きでした。 【自己記述】[7]
- vi. それで、ま、好きなんです、 【自己記述】[7]
- vii. 今の季節は本当は赤がいいなと思ってのるんですね。 【自己記述】[7]
- viii. 皆さんも冬赤着ると元気が出るとおっしゃってる方も
何かいらっしやいましたけども 【実況】[2]
- ix. 確かに今年は赤がきれいに見えるんです 【説明】[13]
- x. でも、好き、一年通して好きって言うか何ていうのかな
義務的に好きになんなくちゃいけないみたいな感じで 【自己記述】[7]

- | | |
|------------------------------|-----------|
| xi. 青を あの よく使ってます | 【自己記述】[7] |
| xii. 夏はあのもう抵抗なく、この青がいいんですけど、 | 【自己記述】[7] |
| xiii. 今はちょっと寒々しい気がしております | 【自己記述】[7] |
| xiv. 以上です | (位置づけ) |
- (テーマ「私の好きな色」| セッション B P04 「話題提供」)

一方、テーマ「平成から令和」では、「私の好きな色」で多用された【自己記述】[7]はほとんど見られず、自分や対話の相手、その場にあるものを主語にして過去形で話す【状況内回想】[3]が、いずれのセッションでも15回前後と最も多く用いられている。例えば、「僕は東京ドーム行ったんですね」「秋田に行ってきました」「ずーっと並んで印をいただきました」のように、写真を撮った場所や撮った行為について説明する発話が【状況内回想】[3]に該当する。また「私の好きな色」では全く見られなかった【状況外回想】[10]の使用も目立つ。これは「歌舞伎座のところのマーケットで あの いろいろ売り出しがあったんで」「昭和の最後 千九百八十八年に出来上がって」「人がいっぱいいたんですけれども」のように、主語が共想法の行われているその場ではなく、時制が過去の場合に該当する。これら「平成から令和」で多用される【状況内回想】[3]や【状況外回想】[10]は、「私の好きな色」では0～1回の使用に留まるセッションが大半を占めている。このように、選択するテーマによって使用される修辞機能に偏りがあり、それぞれ異なる特徴があることがうかがえる。

以上、セッション単位で14名の参加者全体の傾向について見てきたが、この傾向が参加者個人に共通して見られるのか、それとも個人毎に異なる傾向を示すのかを確認するために、参加者毎の特徴を見ていく。2.1節で述べた通り、分析対象をP01～P06の6名に限定する。表6と図4は、テーマ別の6名の参加者毎の「話題提供」における修辭機能の出現数と出現率である。

表6 参加者毎の「話題提供」における修辞機能の出現数

[illegible]

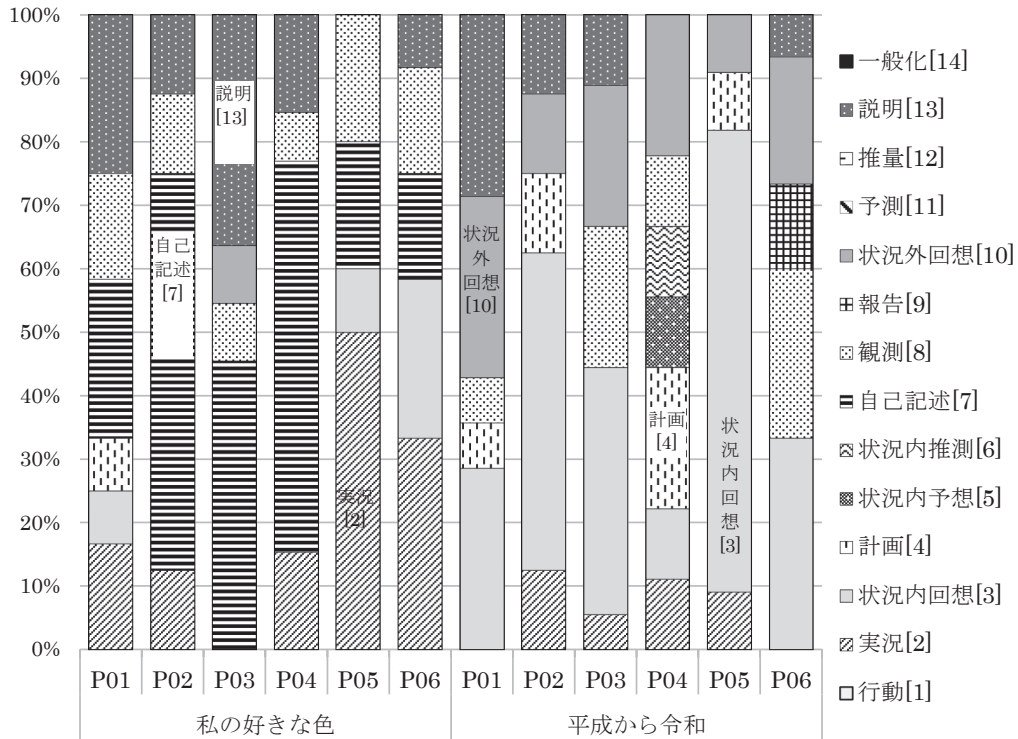


図4 参加者毎の「話題提供」における修辞機能の出現率

参加者それぞれの修辞機能を確認すると、「私の好きな色」では6名中4名が【自己記述】[7]を最も多く使用しており、「平成から令和」では5名が【状況内回想】[3]を最も多く使用している。これはいずれも図3に見た全体の傾向と一致する。上で述べた通り、テーマによって使用される修辞機能に傾向が見られるが、その傾向は個人によらず観察されることが分かる。以下、「私の好きな色」での【自己記述】[7]、「平成から令和」の【状況内回想】[3]と【状況外回想】[10]を、「テーマの基本の修辞機能〔脱文脈化指数〕」とする。

一方、修辞機能の使用傾向には個人差も見られる。「話題提供」の談話におけるセッション毎の修辞機能（脱文脈化指数）の推移を示した図5を見ると、P04を除く5名に関して、2つのテーマに類似した、いわば個人特有の修辞機能の現れ方を見ることができる。例えばP01とP03は、各テーマの基本的な修辞機能の合間に【説明】[13]を用いる傾向がいずれのテーマにおいても観察される。また、P02とP06は、いずれのテーマでも脱文脈化指数が低から中程度の修辞機能を中心としつつ、中程度から高い修辞機能も交えて脱文脈化指数を変化させた発話を行っており、P05はいずれのテーマでも脱文脈化指数が2～3の低い修辞機能を中心としつつ、高い修辞機能も多少交えている。このように、テーマによらない個人の特徴もうかがえる。

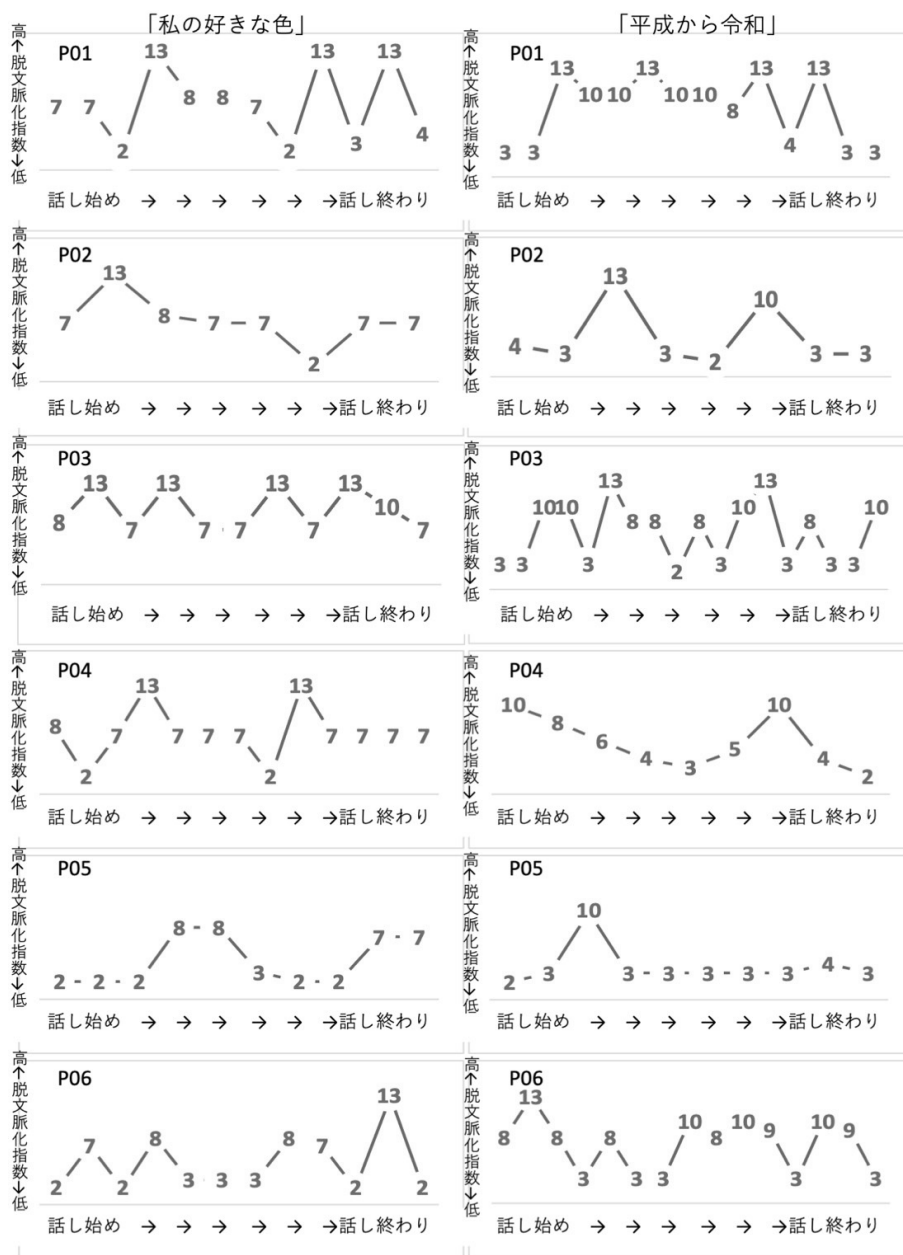


図5 テーマ毎、参加者毎の「話題提供」における脱文脈化指数の推移

3.2 「質疑応答」の分析

本節では「質疑応答」の特徴について見ていく。「質疑応答」では、「話題提供」において参加者が紹介した写真が再度提示され、他の参加者の質問や感想に対して話題の提供者が回答する。このように他の参加者とのやりとりが生じるため、「話題提供」とは異なる修辞機能の特徴が見

られる可能性もある。表7と図6は、表5と図3のセッション毎の「話題提供」における修辞機能の出現数の表及び出現率のグラフに、「質疑応答」における修辞機能を合わせて示したものである。表1に示したように、「私の好きな色」の「質疑応答」は2分、「平成から令和」の「質疑応答」は1分のため、発話量が異なっている点に注意して結果を見ていく。

表7 各テーマのセッション毎の「話題提供」と「質疑応答」における修辞機能の出現数

	私の好きな色						平成から令和					
	A		B		C		D		E		F	
	話題	質疑	話題	質疑	話題	質疑	話題	質疑	話題	質疑	話題	質疑
一般化 [14]	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
説明 [13]	5	47	6	27	6	45	1	20	1	14	7	14
推量 [12]	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0
予測 [11]	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
状況外回想 [10]	0	3	1	2	0	5	7	13	4	10	11	8
報告 [9]	0	7	2	3	0	6	0	11	1	3	2	3
観測 [8]	4	11	4	31	8	39	1	16	5	15	9	37
自己記述 [7]	12	23	16	19	9	17	1	1	1	3	0	4
状況内推測 [6]	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0
状況内予想 [5]	0	1	0	1	0	2	1	1	0	2	0	0
計画 [4]	1	2	0	0	1	0	4	0	0	0	1	0
状況内回想 [3]	1	5	0	7	9	12	18	14	14	21	16	3
実況 [2]	6	9	4	5	11	7	4	3	6	5	1	6
行動 [1]	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1

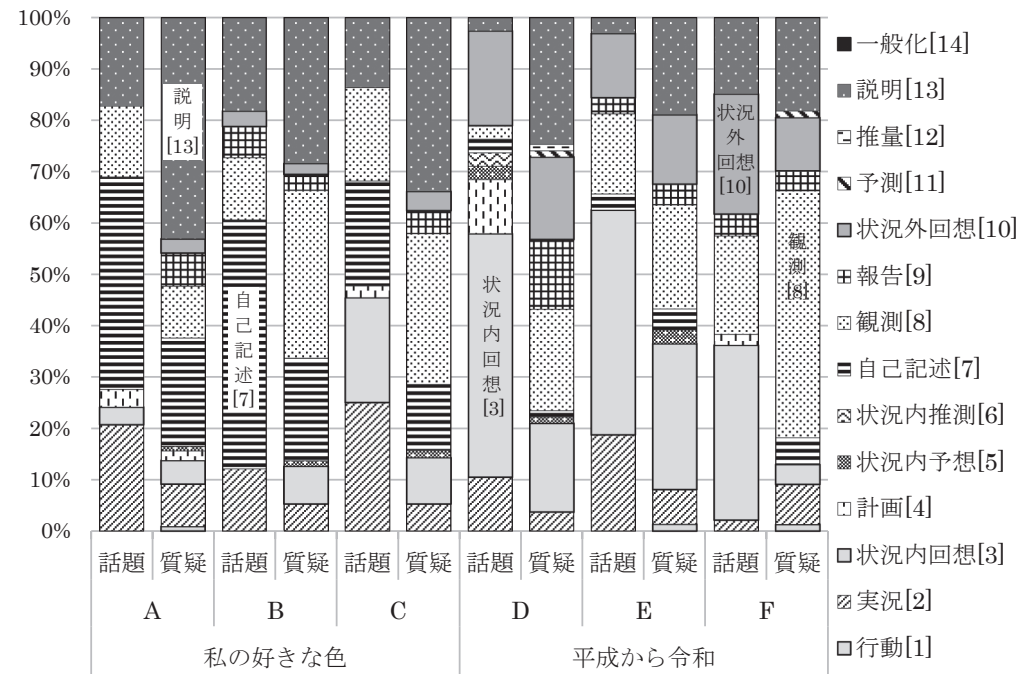


図6 各テーマのセッション毎の「話題提供」と「質疑応答」における修辞機能の出現率

「私の好きな色」の「質疑応答」では、3つのセッションに共通して、【説明】[13]・【観測】[8]・【自己記述】[7]が10回以上、また「平成から令和」では、3つのセッションで【観測】[8]・【説明】[13]が、2つのセッションで【状況内回想】[3]・【状況外回想】[10]が10回以上用いられるなど、共通して多用される修辞機能が観察される。このうち「私の好きな色」で多い【自己記述】[7]と、「平成から令和」で多い【状況内回想】[3]・【状況外回想】[10]は、3.1節で指摘した「話題提供」で使用されるテーマの基本の修辞機能である。このように、テーマによる修辞機能の出現傾向が「話題提供」と「質疑応答」に共通して見られることが分かる。一方、テーマの基本の修辞機能以外の【観測】[8]と【説明】[13]は、セッションにより出現率は異なるものの両テーマにともに観察される。つまりテーマに依存せず用いられやすい修辞機能と考えられる。

次に、「質疑応答」における修辞機能の出現について個人の特徴を調べる。ここでは、2.1節に示したように、テーマ「平成から令和」のセッションFの3名の参加者（P01, P03, P06）を対象とする。表7と図6で見た通り、セッションFでは全体の傾向として【観測】[8]が突出している。表8と図7に、P01, P03, P06のそれぞれの「話題提供」とその話題に対する「質疑応答」における質問と応答の修辞機能の出現数と出現率を示す。

表8と図7から、3名の参加者共に「質疑応答」パートにおける質問（話題提供者以外の発話）で【観測】[8]を使用していることが分かる。P03とP06は、自身の「話題提供」においても【観測】[8]を少なからず使用しているが、P01は「話題提供」ではあまりこの修辞機能を用いていない。つまりP01は、「話題提供」ではあまり用いない修辞機能を「質疑応答」の中では多く用いているということである。

表8 セッションFの「話題提供」と「質疑応答」における修辞機能・脱文脈化指数の出現数

	P01				P03				P06			
	話題提供	質疑応答			話題提供	質疑応答			話題提供	質疑応答		
	P01	P01 応答	P03 質問	P06 質問	P03	P03 応答	P01 質問	P06 質問	P06	P06 応答	P01 質問	P03 質問
一般化 [14]	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
説明 [13]	4	5	4	0	2	1	1	0	1	3	0	0
推量 [12]	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
予測 [11]	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
状況外回想 [10]	4	1	0	1	4	0	0	1	3	3	0	2
報告 [9]	0	0	0	0	0	2	0	1	2	0	0	0
観測 [8]	1	0	4	4	4	5	5	11	4	1	3	3
自己記述 [7]	0	0	0	0	0	0	2	0	0	2	0	0
状況内推測 [6]	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
状況内予想 [5]	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
計画 [4]	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
状況内回想 [3]	4	0	1	0	7	0	0	0	5	2	0	0
実況 [2]	0	0	0	0	1	1	1	4	0	0	1	0
行動 [1]	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0

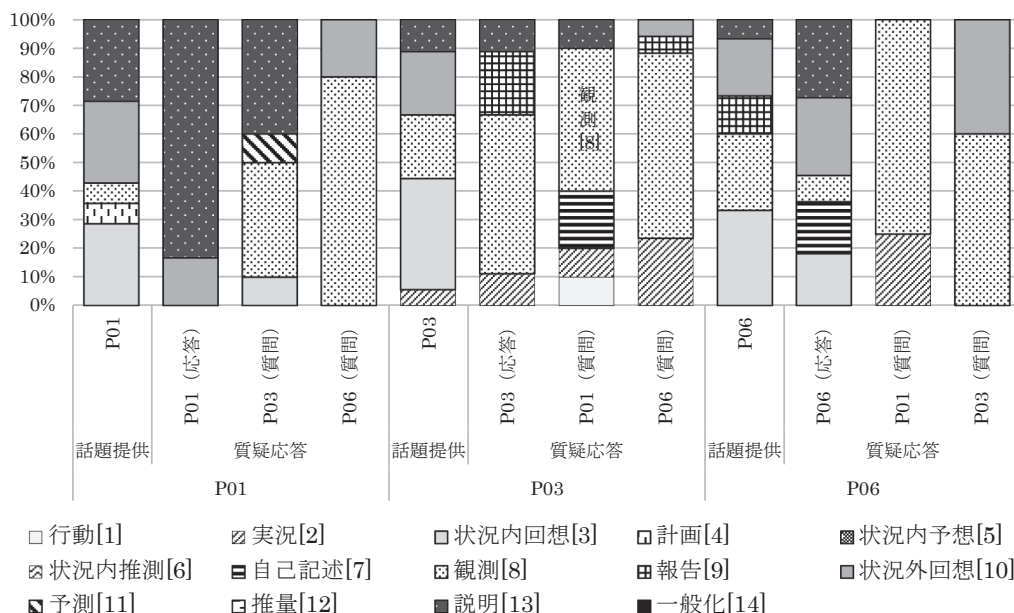


図7 セッションFの「話題提供」と「質疑応答」における修辞機能・脱文脈化指数の出現率

具体的な発話例を見てみよう。P06の写真についての「質疑応答」の一部を(4)に示す。この中でP01は【観測】[8]を2回用いている。1つはi「軽井沢のどこですか これは」という発話で、P06への質問、もう1つはix「へー すごいきれい」という発話で、評価を伴う反応である。このように「質疑応答」では、質問や回答だけでなく、写真に写っているものや話者の行動、考え等に対する評価的な反応も少なからず見られる。質問、回答、評価など多様な談話行為を伴う「質疑応答」の場面では、P01のように、例え自らの「話題提供」ではあまり用いない修辞機能の発話であっても、おのずと【観測】[8]の発話をするといったように、修辞機能の多様化につながると考えられる。

- | | | | |
|-------|-----|--------------------|-------------------|
| (4) | 発話者 | メッセージ | 【修辞機能】 [脱文脈化指数] |
| i. | P01 | 軽井沢のどこですか これは。 | 【観測】 [8] |
| ii. | P06 | 軽井沢です。 | 【観測】 [8] |
| iii. | P06 | あっ。 | |
| iv. | P01 | あ 軽井沢。 | |
| v. | P01 | 軽井沢の | |
| vi. | P06 | うん。あの家があるもんでね | 【説明】 [13] |
| vii. | P01 | あ 別荘。 | |
| viii. | P06 | 毎年行ってる 行ってるんですけども。 | 【自己記述】 [7] |
| ix. | P01 | へー すごいきれい。 | 【観測】 [8] |

x. P06 あの 夏でも あの あの なんだっけ。

xi. P03 軽井沢。

xii. P06 ストープ焚くぐらい寒かった。

【状況外回想】[10]

(テーマ「平成から令和」セッション F P06 「質疑応答」より)

4. 考察

本研究では、共想法による高齢者談話の特徴を明らかにするために、修辞ユニット分析に基づき、1) テーマによって修辞機能・脱文脈化指数はどのような傾向を示すか、2) 個人差は見られるか、3) 「話題提供」のパートと「質疑応答」のパートで異なりは見られるか、などの観点から分析を行った。

1) については、テーマによって用いられやすい修辞機能に偏りが見られ、それぞれ異なる特徴を示すことが分かった。具体的には、「私の好きな色」では【自己記述】[7]が、「平成から令和」では【状況内回想】[3]と【状況外回想】[10]が多く用いられていた。またこの傾向は、同テーマで行われた複数のセッションに共通して見られること、複数の参加者が同じ傾向を示すこと、「話題提供」と「質疑応答」に分けても共通して観察されることから、テーマに依存した修辞機能の偏りがかなり強いことがうかがえる。

仮に、高齢者の認知機能の強化のために、特定の修辞機能に偏らずできるだけ多様な修辞機能の発話をするのが望ましいとするならば、この結果は、類似したテーマで共想法の談話を繰り返すのではなく、できるだけ異なる種類のテーマを選択することが重要となることを示している。2.1 節で言及したように、共想法でテーマを選定するにあたり、①身近な物の価値を見つけ出す、②行動したことから価値を見つけ出す、③行動を計画する、という3つの観点を設けている。今回の分析で、①の要素を含む「私の好きな色」と、②③の要素を含む「平成から令和」で異なる修辞機能の使用が見られたことから、こうした3つの観点を配慮してバランスよくテーマを選定することで、おのずと修辞機能の多様化につながる事が考えられる。

次に2)の個人差であるが、上述の通り修辞機能の使用についてテーマによる強い偏りが見られはするものの、それに加えて、テーマによらない個人特有の修辞機能の用い方もあることが分かった。個人によって話し方に個性があり、そのことが特有の修辞機能の用い方につながっていると考えられる。しかし認知機能強化のためにできるだけ多様な修辞機能を用いた方が良いとするならば、こうした偏りは問題ともなりうる。この点については、3)の分析で明らかになった、「質疑応答」での修辞機能の用い方に関する結果と合わせて考えたい。分析から、「話題提供」ではあまり用いない修辞機能であっても、質問、回答、評価など多様な談話行為を伴う「質疑応答」の場面では用いられることがあること、その結果、使用する修辞機能の多様化につながりうる事が分かった。

このように、テーマや個人に依存して修辞機能の使用が偏ることもありうるが、異なる種類のテーマによる共想法をバランスよく重ねることにより、また「話題提供」だけでなく、質問、回答、評価など多様な談話行為を伴う「質疑応答」を含めることにより、多様な修辞機能の使用に

つながっている実態が今回の分析から明らかになった。

5. まとめと今後の課題

本研究は、高齢者の認知機能を補完しうる言語能力の指標として、脱文脈化観点が適用可能かを明らかにすることを目的に、その第一段階として、共想法による高齢者談話の特徴を明らかにすることを試みた。共想法は、高齢者の認知的健康につながる会話を確実に発生させることができるよう工夫を加えた会話支援手法である。2種類のテーマに基づく共想法談話各3セッションを修辞ユニット分析の分類法に基づいて検討した結果、1) テーマによって修辞機能の使用に偏りが見られること、2) テーマによらない個人特有の修辞機能の用い方もあること、3) 質問、回答、評価など多様な談話行為を伴う「質疑応答」の場面では使用する修辞機能の多様化につながりうることが分かった。以上の結果は、共想法が多様な修辞機能の使用を促す設計となっていることを示唆するものである。

本研究は、2回の共想法談話データを対象にしたもので、また、質疑応答は1つのセッションの3名についてのみの分析であった。高齢者の認知機能を補完しうる言語能力の指標として、脱文脈化という観点が適用可能であることを明らかにするため、今後、分析対象とする共想法談話データを増やして、様々なテーマでの「話題提供」及び「質疑応答」、また複数のセッションの「質疑応答」における修辞機能の使用や脱文脈化指数の推移などについて、本研究での知見をさらに確認していきたいと考える。

参考文献

- Cloran, Carmel (1994) Rhetorical units and decontextualisation: An enquiry into some relations of context, meaning and grammar. Ph. D. thesis, Nottingham University.
- Cloran, Carmel (1995) 10. Defining and relating text segments. In: Ruqaiya Hasan and Peter H. Fries (eds.) *On subject and theme: A discourse functional perspective*, 361-403. Vol. 118. John Benjamins Publishing. <https://doi.org/10.1075/cilt.118.11clo>
- Cloran, Carmel (1999) Contexts for learning. *Pedagogy and the shaping of consciousness: Linguistic and social processes* 31: 65.
- Cloran, Carmel (2010) Rhetorical unit analysis and Bakhtin's chronotype. *Functions of Language*, 17(1): 29-70. <https://doi.org/10.1075/fol.17.1.02clo>
- Halliday, M. A. K. & C. M. I. M. Matthiessen (2004) *An introduction to functional grammar*. London: Arnold.
- Otake, Mihoko, Motoichiro Kato, Toshihisa Takagi and Hajime Asama (2011) The coimagination method and its evaluation via the conversation interactivity measuring method. In: Jinglong Wu (ed.) *Early detection and rehabilitation technologies for dementia: Neuroscience and biomedical applications*, 356-364. IGI Global.
- Otake-Matsuura, Mihoko, Seiki Tokunaga, Kumi Watanabe, Masato S. Abe, Takuya Sekiguchi, Hikaru Sugimoto, Taishiro Kishimoto and Takashi Kudo (2021) Cognitive intervention through photo-integrated conversation moderated by robots (PICMOR) program: A randomized controlled trial. *Frontiers in Robotics and AI* 8: <https://doi.org/10.3389/frobt.2021.633076>
- 岩田純一 (1995) 「学校と発達」 岩田純一・佐々木正人・石田勢津子・落合幸子『児童の心理学』東京：有斐閣。
- NPO 法人ほのぼの研究所 (2020) 『老化防止と認知症予防に役立つ！共想法ガイドブック』
- 大武美保子 (2010) 「認知症予防回復支援サービスの開発と忘却の科学」『人工知能学会論文誌』25(5): 662-669.
- 大武美保子 (2011) 『介護に役立つ共想法』東京：中央法規出版。
- 佐野大樹 (2010a) 「日本語における修辞ユニットの方法と手順 ver.01.1—選択体系機能言語理論 (システムミツ

- ク理論)における談話分析—(修辭機能編)」https://researchmap.jp/multidatabases/multidatabase_contents/detail/228720/34ec2728989b398c8dd30e659251320e?frame_id=486573 (2021 年 6 月 9 日アクセス)
- 佐野大樹 (2010b) 「選択体系機能言語理論を基底とする特定目的のための作文指導方法について—修辭ユニットの概念から見たテキストの専門性—」『専門日本語教育研究』12: 19–26.
- 佐野大樹・小磯花絵 (2011) 「現代日本語書き言葉における修辭ユニット分析の適用性の検証—「書き言葉らしさ・話し言葉らしさ」と脱文脈化言語・文脈化言語の関係—」『機能言語学研究』6: 59–81.
- 田中弥生 (2018) 「児童・生徒作文の日本語修辭ユニット分析と教員評価の検討」『言語資源活用ワークショップ発表論文集』3: 91–104.
- 田中弥生・浅原正幸・小磯花絵 (2020) 「手順説明談話における脱文脈化の様相」『言語処理学会第 26 回年次大会発表論文集』720–723.
- 田中弥生・小磯花絵 (2019) 「家庭での幼児の発話の修辭機能: 脱文脈化の観点からの検討」『言語資源活用ワークショップ発表論文集』4: 106–118.
- 田中弥生・小磯花絵 (2021) 「取引先との打ち合わせ談話における脱文脈化観点からの特徴」『言語・音声理解と対話処理研究会』91: 85–90. 人工知能学会.
- 田中弥生・小磯花絵・大武美保子 (2021) 「共想法談話の脱文脈化観点からの検討」『言語処理学会第 27 回年次大会発表論文集』569–573.
- 田中弥生・佐尾ちとせ・宮城信 (2021) 「児童作文の評価に向けた脱文脈化観点からの検討」『言語処理学会第 27 回年次大会発表論文集』750–755.
- 田中弥生・藤越・小磯花絵 (2021) 「作業遂行時における幼児と母親の会話のスタイルシフトと脱文脈化」『社会言語科学会第 45 回大会発表論文集』172–175.

An Analysis of Older Adult's Discourse Based on the Coimagination Method from the Perspective of Decontextualization

TANAKA Yayoi^a

KOISO Hanae^b

OTAKE-MATSUURA Mihoko^c

^aAdjunct Researcher, Spoken Language Division, Research Department, NINJAL

^bSpoken Language Division, Research Department, NINJAL

^cRIKEN Center for Advanced Intelligence Project (AIP)

Abstract

This paper aims to clarify the nature of the discourse of older adults recorded using the Coimagination Method, a conversation support method that aims to activate cognitive functions in older adults from the perspective of decontextualization, as the first step of a study analyzing whether the decontextualization perspective can be applied as an indicator of language ability to enhance the cognitive functioning of older adults. For analysis, we used the taxonomy of Rhetorical Unit Analysis, a discourse analysis method within the framework of Systemic Functional Linguistics. Rhetorical Unit Analysis provides information on the rhetorical function and decontextualization index of each unit of analysis, the “message” (a clause). We analyzed three sessions of the Coimagination Method discourse on two different themes. The results showed that the rhetorical functions used for each theme were different. Furthermore, the rhetorical functions used for each theme were commonly observed in multiple sessions across multiple individuals in both the “topic presentation” and “question-and-answer” parts of the sessions. In addition, it was found that some rhetorical functions that were not dependent on the theme were used in the “topic presentation,” and that some rhetorical functions that were not often used in the “topic presentation” were used in the “question-and-answer” part.

Keywords: Coimagination Method, older adult's discourse, decontextualization, rhetorical function, Rhetorical Unit Analysis